

「水とうつわ」

— 水を入れる、水をそそぐ道具たち —

1. 概要

わたしたちの身のまわりには様々な、水を扱う道具がある。遺跡から出土するそれらの道具の中には、現在は使われなくなった形状ものもあれば、ほとんど同じかたちをしている道具もある。夏にふさわしい、水を扱う道具の移り変わりを通して、先人達が道具に込めた工夫の歴史をたどる。

2. 展示資料一覧

遺跡名	種別	点数	遺跡名	種別	点数
越名西遺跡・越名河岸跡 (佐野市)	染付徳利	1	黒袴台遺跡 (佐野市)	銅製 杓	1
八幡根東遺跡 (小山市)	製塩土器	1	八剣遺跡 (壬生町)	縄文土器 注口土器	2
清六Ⅲ遺跡 (野木町)	須恵器 横瓶	1	権現山遺跡 (宇都宮市)	須恵器 甕	1
大関台遺跡 (宇都宮市)	須恵器 甕	1	磯岡北1号墳 (宇都宮市)	須恵器 甕	1
鶴田A遺跡 (真岡市)	須恵器 横瓶	1	西赤堀遺跡 (上三川町)	片口	1
			菅田31号墳 (足利市)	須恵器 埴瓶	1
			権現山遺跡 (宇都宮市)	曲物	1
			合計		13

3. パネル一覧

パネル名	内容
1 はじめに	遺跡から出土する、様々な水を扱う道具の形から、道具の普遍性と改良の歴史を垣間見る。
2 水を入れる道具	水道の無かった時代、身近に水を溜めておく大型容器が不可欠であった。一方、そこに水を運ぶための器は、現在のバケツに見ることができる。
①曲げ物	ヒノキなどのうすい板を曲げてつくられた、今のバケツや洗面器などに近い器。
②提瓶	水を持ち歩いたり、水をくむときにも使われた古墳時代の器。形も用途も、現在の水筒に近い器である。
③徳利	江戸時代に形が完成し、現在も使われ続け、身近に存在する注ぐ器。
④柄杓	杓は水をくむ道具で、今も神社などでよく見かける。むかしから形状は変わらない。
3 水を注ぐ道具	現在のヤカンや急須のような形状の器は縄文時代から存在した。ハソウは古墳時代のそそぐ器で、儀式などに使われた。
①注口土器	注口土器は縄文土器の一種で、今のやかんや急須と同じ形をしている。だが、内容物や、使用場所などは不明な点が多い。
②甕	注口が取り外しできるところが特徴の器。古墳時代の儀式などに使用され、酒や水などをそそぐ器と考えられている。
③平瓶	平たく安定のよい器で、注口の他、上面に把手が付き、機能的な形をしている。水や酒をそそぐ器と考えられる。
④片口	水や酒を小さな器や口の小さい器に小分けにするに使われた、注ぐ器である。



展示風景